

「JAM」

ドラムのハイハットを刻む音が聞こえる。
そこにだんだんとバスの音が重なっていく。
スクリーンに文字が変わった形が出る。

「その世界はある人間にとって平和だった」
「しかしある人間にとってその平和は平穏ではなかった」

スネアの音が重なりリズムになる。

「全ての物が混ざり合ったその世界は」
「決して」
「一つではなかった」

明かりがつく舞台上に掲げられたマークが浮かび上がる。
扉が開く音、そこに入って来るのはマークをつけた男(兵1)、
マークのついていない男(カタダ)。

兵1「可哀想だけどね。私も気分良くないけど。これも決まりだから(手錠をはずしながら)」
カタダ「ちょっと君」
兵1「なんだ？」
カタダ「鼻毛が凄い出てるけど」
兵1「おしやれた、人は一番最初に顔を見るだろう？だからこれはおしやれた」
カタダ「なぜか今、頭の中が可哀想という言葉で一杯だ」
兵1「可哀想なのはお前だ、さあマークを渡したまえ」
カタダ「ああこれね(マークを出し)」
兵1「さあ」
カタダ「(マークをビリビリにやぶいて)はい」
兵1「あつやぶった、ねえ、いま破ったよね？」
カタダ「バーカ」
兵1「貴様—！！」

兵1、カタダを持っている棒でポコポコにする、その辺の犬とか猫とかも
蹴飛ばしたり、叩いたり、ワンワンニャンニャン

カタダ「へへへ、騒がしいね」

兵1「わかっているのか？お前はもうマークのついた人間じゃない。
マークの付いた私とお前にはもうこれはもう覆る事のない絶対的な
格差がついてしまったんだ。わかる？マークのついていない人間は
障害者！！これこの国の常識！決まりを守らないものこれ障害者！
常識！障害者を産んだ親！これも障害者！これも常識！」

カタダ、転がっている犬で兵1を殴る

兵1「犬で殴るな、肉球ザラザラ！」
カタダ「だから俺の子供を奪ったのか？」
兵1「そうそれ常識(殴られる)」
カタダ「この国は弱いものには滅法強いな(ゆっくり蹴ったり殴ったり)」

兵1笛を鳴らす、駆けつける兵2

兵2「何やってんだ？」
カタダ「ゆっくり蹴ったり殴ったり」
兵2「みりゃわかるよ、やめないかー」

カタダを羽交い締めにする兵2、むくりと起き上がる兵1

兵1「お前の子供が障害者だった、これ事実。そしてお前マーク取られる。
これ常識。そしてもう一つの常識を教えてやろうか？
マークのついた人間はな！マークのついていない人間に！！
何をやっても許されるんだよ！！」

棒でカタダをボッコボコにする、ドラムは激しくなる。
高笑いする兵士、去っていく。カタダは倒れてピクリとも動かない
ドラムが止み。
上手側、新聞が撒かれる

新聞屋「女王様のご懐妊だー！！」

ゾロゾロと出てきて新聞を読み漁る人々。
口々に喜びの声をあげる
街一番の歌い手カノンが歌声をあげると華やかな音楽が流れる。
立ちあがりそれを見つめるカタダ
街人歌い踊る

カノン 歌

「この世界は混ざり合って出来てる
幸せと不幸せが混ざってる
指の無い子供と指の多い子供が助け合う事無く
すれ違う
この世界は徐々に小さくなってく
希望と絶望が入れ替わる
心無い大人も顔の無い大人も助け合ったフリを
続けてる

だけど今日はこの国に

王子様が産まれる日だから
今だけは全て忘れて声をそろえて声をそろえて
ハッピーバースデートゥーユー
ハッピーバースデートゥーユー

誰も本当の事は知らない
誰か教えて本当の事を」

街人歌い踊り終わりストップモーション

カタダ「それは俺の子供だ」

上手上段に現れる国王たかだかと子供を上に掲げる。横には執事のモービス。
ストップ解けて、歓声に包まれる街

カタダ「それは俺の子供だ！」

ぞろぞろといなくなる人々

国王「大変な事になるところだったねモービス」

モービス「はあ」

国王「君は何も見えてない、何も知らない」

モービス「しかし」

国王「それともだ、君を何も見えない何も知らない人にする事だって出来る。
する事も出来るし、君が自ら見えない知らないと言えればそれはそれで
良い。私は間違った事は？」

モービス「言ってません」

国王「結構」

モービス「国王、それではあなたの本当のご子息はどうしましょう？」

国王「モービス、本当に理解しているのかな？不思議な事を聞く。

これが我が子じゃないか？それとも何か？これは我が子ではなく

週刊ゴングだとでも言いたいのかね？これをペラペラとめくれば

佐々木健介の独占インタビューが載っているのかね？

今週もあれかね？北斗アキラとの夫婦生活についてかね？」

モービス「すいません」

国王「なぜ謝る？間違った事をしたのか？したのならば罰をば与えねば
ならんが」

モービス「いいえ」

国王「モービスこれから言う事は君が聞かない事だ、私は言う。

しかし君は聞かないんだ」

モービス「はあ」

国王「……さすがの私も障害者だからと言って実の息子を殺すのは
忍びない、あの子を誰にも見つからない遠くへと飛ばしてくれ」

モービス「飛ばすんですか？」

国王「私が危険に陥った時に使う脱出用のロケットがある。それを使え」

モービス「かしこまりました」

国王「秘密を知るものは？」

モービス「全て仰せのままに」

国王「ごくろう、それで？何か聞いたか？」

モービス「いえ何も」

国王「よろしい」

国王はける

モービス、舞台上に供えつけてあるロケットに火をつける

モービス「ごめんな、いい人に拾われるんだぞ。ぎゃあああこいつ噛みやがった。

(パンチを何発も繰り出す)うわー、めっちゃ怪我した。まあいいか。

元気でな」

轟音がなる

立っているカタダ

カタダ「最悪な一日の終わりに。俺は流れ星を見た。それは真っ暗だった

目の前を照らす最後の希望の様にゆっくりとゆっくりと

流れていった。俺の希望は今日消えかけて

また燃えた。一度消えかけた火は再燃した時また一段と

強く燃えるものだ。今まで感じた事もないような不思議な感覚が

油汗みたいにじっとりと身を包んでいた。

そして騒音の沈黙が弾ける様に痣だらけでボコボコの身体が自然とその光を追って、動き出した。」

走り去るカタダ

スクリーンにオープニング映像

「その嘘は何も変えないままに」

「20幾数年」

スクリーンにマークが映りこむ。

スクリーンが落ちる

舞台上照明、今後マークのあるものに(有り)無いものに(無し)表記

マダムアルファ(有り)と正和(無し)出てくる

マダム「さあ片付けな、ノロノロしないようにね。あんた恵まれてるよ

二足歩行なんだからチンパンジーじゃないんだから、なによチンパンジーって

二足、四足、二足、四足、繰り返しちゃってさ。あんたはさ、そうじゃないんだ。その上このマ

ダムアルファが雇ってやってるんだ」

正和「まんこ臭い」

マダム「ぶつよ？」

正和「ごめんなさい」

マダム「あんたらはね、私らには逆らえないんだから。匂いを嗅ぐのだって義務の内だよ。義務が有るってのは有りがたい事だ。世の中には生きる義務を無くしちゃってこの世にいられない人間もたくさんいるんだからね」

正和「マダムアルファ」

マダム「なんだい？」

正和「片付けたよ」

マダム「良くやったね、いや、良くやったなんて言葉はあんたには似合わないね。まあまあだね。まあまあだ」

正和「ありがとうマダム」

マダム「ありがとうって言葉はいい言葉だ、だがあんたが軽しく言うな。まだまだそんな事を言えるステージには立てないんだよ、あんたはリンジャなんだから、ありがとうが1だとすれば0.9ぐらいの言葉をいいな。0.9……テンキューこれでもいいわテンキュー」

正和「テンキュー」

マダム「また言葉を作ってしまった、私は天才だね。天才子役さ。安達カルキンさ。あー頭が痛い」

下手からエニマル(無し)とモズク(有り)が入って来る
走りまわる

エニマル「わー」

モズク「ワー」

エニマル持っていた棒でマダムアルファを殴る

マダム「ビックリする事をするね、あんた。頭が痛いと言ったそばから」

エニマル「こんにちは」

マダム「エニマルちよつとあっち行ってな」

エニマル「うるせえクソばばあ」

マダム「あっはっは殺しちゃうかしら、正和相手しな」

正和「テンキュー」

正和とエニマル遊ぶ

マダム「モズク、あんたリンジャと遊んじゃダメだっていったでしょ」

モズク「でも」

マダム「でももへちまも無いよ」

モズク「へちまはあるよ(へちま的な物をだす)」

マダム「あんの？あら本当、ってへちまじゃない！！さすが私の娘だね、だけどね。それとこれとは話が別だよ。」

モズクへちまで殴る

マダム「そう言う所はお父さんそっくりだね。いいかい？あんたとエニマルは身分が違うんだ。例えば
ね、この題材を蜷川幸雄に預けるならば現代版ロミオとジュリエットだよ」

モズク「なんで？同じ人間なのに」

マダム「同じ人間じゃないんだよ、見てくれは同じでもさ。水と油さ。
遠くから見たら一緒でも絶対に混ざらない、それが私らとリンジャなのさ」

エニマルと正和後ろからギターを運んでくる

モズク「ああ、何それ？」

マダム「話を聞きな、モズク」

モズク「うるせえクソババア」

マダム「ほら悪い影響、正和、勝手に触るなって言ってるだろ」

正和「でもマダム」

マダム「口答えする気かい？」

正和「いいえ」

マダム「これはあんたが、いや、リンジャが触って良いような物じゃないんだよ。
リンジャが触ると必要以上に指紋がつくようにできてるのさ。

セコムしてるのさ。リンジャ専用のね！！」

エニマル「これちゃうだい」

マダム「え？」

エニマル「これちゃうだい」

マダム「ちゃうだいてなんだ？頂戴って事かい？わかんないねあんたらの話す言葉」

モズク「あげてあげて」

マダム「あんたの言葉まで乱れてる、まったく悪い影響だ」

エニマル「ちゃうだい」

モズク「あげてあげてちゃうだい」

マダム「正和！！」

正和「はい、マッドアダム」

マダム「マダムだよ、マッドアダムって何よ、悪いアダム？これだからリンジャは！
さっさとしまいなさいそれ、(エニマルに)あんたも出ていきな。

悪い噂が立つだろ？家の娘とリンジャが付き合ってるって、さあ行くんだ」

マダムアルファ、エニマルを追い払う

ギターを片付けようとする正和

モズク「正和！それ頂戴」

正和「お嬢さん」

モズク「頂戴」

正和「しかしマダムに」

モズク「正和はリンジャなんだから私の言う事聞くのよ」

正和「はい」

モズク「これなんて言うの？」

正和「ギターです」

モズク「何をやる道具かしら？」

正和「これは……貸してください」

正和ギターを弾く、悲しいメロディ

モズク「音が鳴るのね、すごいわ正和、あんたにこんな特技があったなんて」
正和「お嬢さん、男は波止場で一人悲しくこれを弾くのです。そのメロディーは
波音にかき消される事無く、遠く愛しいあの人の元へ届くのです。

手は届かなくても、想いは風に乗れば方へと届くのですよ……」

モズク「正和………気持ち悪い」

正和「ええ！！」

モズク「兎に角、この事はママには内緒よ」

正和「はい、お嬢さん」

モズク、正和はける

上手上段にウラミネ(有り)

ウラミネ「誰か、誰かいないか？モービス！！モービスはいないか？」

モービス出てくる

モービス「なんでしょう王子」

ウラミネ「かたつくるしいな王子なんて呼ぶな」

モービス「ゴミ野郎」

ウラミネ「おい！出てきて早々にそんな風に呼ばれたらそういう名前だと
思われちゃうだろ誰かに！！普通に俺の名前に様で良い」

モービス「ウラミネ……様」

ウラミネ「ちょっと躊躇ったようだがそれで行こう」

モービス「チッ」

ウラミネ「まあ聞かなかった事にしよう」

モービス「ペェ！！(つばを吐きかける)」

ウラミネ「俺は寛大だから許してやろう、ところでモービス。

この間の晩餐会で俺に向かって気持ち悪いとかなんだとか

ハンバーグに付いて来るナポリタンだとかそのような

悪口を言った小娘、あれは誰だ？」

モービス「あれは貿易商、マダムアルファの一人娘モズクでございます」

ウラミネ「モズクか」

モービス「それにしても大バカ野郎様の悪口を言うとは恐れ多い」

ウラミネ「まあ俺は大バカ野郎ではないけどな、お前だけどな」

モービス「噂によるとモズクはリンジャと仲良くしているという噂です。

素行が悪い所を見るとまんざらただの噂では無いようですね」

ウラミネ「仲が良い男がいるのか？それもリンジャ」

モービス「モモンガ様」

ウラミネ「ウラミネだけどな、大丈夫かお前？」

モービス「何故そのような事を」

ウラミネ「あの娘、気に入った。欲しい。手に入れたい。手を入れたい。
手以外にもいろいろと入れたい」

モービス「舌も？」

ウラミネ「うん、舌も入れたい」

モービス「変態様」

ウラミネ「ウラミネだけだな」

モービス「いくらなんでもこの国の次期国王と貿易商の娘じゃ身分が違いすぎます」

ウラミネ「馬鹿者、世の中愛であろう。愛こそが全てであろう、愛があれば
ラブイズオッケーであろう」

モービス「城島様」

ウラミネ「ウラミネだけだな。もうそろそろいいけどな」

モービス「しかしながらこのような事国王様の耳にでも入ったら」

国王「聞いてるよー」

ウラミネ「曲者！！」

ウラミネ手裏剣を投げる

国王「腕を上げたな、しかし私にかわされるとはまだまだ甘いぞウラミネ！！」

国王出てくる、血まみれ

ウラミネ「当たってるよね？」

モービス「さすが国王、まだまだ現役ですな」

ウラミネ「当たってるって」

国王「モービス、タオルを」

モービス「はっ」

ウラミネ「認めれば？当たったの」

国王「ウラミネ、そうか……とうとうお前が恋をしたか？」

ウラミネ「やめろよ親父、こっ恥ずかしい」

国王「お前は私の息子だ、さぞかし器量の良い娘を見染めたのだろう？」

ウラミネ「こんな気持ちはじめてさ、ズキューンってドキューンって
胸を打ち抜かれたんだ」

国王「そうか、お前も大人になったと言う事だな。私は嬉しいぞ」

ウラミネ「親父……」

国王「ならん！！」

ウラミネ「ええー！！」

国王「自覚はあるのか？お前はこの国を治めるんだぞ、そこらへんの小娘に
現を抜かしおって、死ぬ！！」

モービス「国王タオルです」

国王「ああ、お前の結婚相手はもう決めてある。由緒正しき人参農家の」

ウラミネ「農家？農家なの？」

国王「国王ジョークさ、お前の相手は……この俺だ！！……」

えーとね。由緒正しきマルシャッタ家の麗嬢だ……」

ウラミネ「聞いてないよ」

国王「決まってるんだよ、とっくの昔に3日前に」
ウラミネ「最近じゃねーかよ、取り消せよ」
国王「いいか？マルシャッタの娘と結婚すれば隣りの国の領土がもらえるんだよ。
しかも結構なんか良い所、すげーなんか広い、広くてすごい」
ウラミネ「曖昧じゃねーか、兎に角そんなの絶対に嫌だよ、親父のバカ！！
わ——ん」

ウラミネ走ってはける

国王「困ったもんだな」
モービス「このブサイク野郎が、死んじまえ！！」
国王「あっはっはっは、言いすぎだよ」

下手にカタダ、身体中ペンキで汚れている、国王とモービス去る
カタダ、ペンキを運んでくる、そこへエニマルがギターを持って入ってくる

エニマル「父ちゃん！！」
カタダ「おう、エニマル、なんだそれは？」
エニマル「カマボコ！！嘘！！ギター！！」
カタダ「元気だな、で？どうしたんだそれ」
エニマル「貰った、モズクに貰った」
カタダ「(エニマルをぶん殴って)返して来い」
エニマル「なにすんだ父ちゃん」
カタダ「あいつらに施しは受けるな。自分のレベルを落とすな。
俺達は物乞いじゃねーんだ」
エニマル「俺は物乞いじゃねー」
カタダ「わかったら返してくるんだ」
エニマル「嫌だ！！」
カタダ「エニマル」
エニマル「だって父ちゃんこれすげーんだぞ、音が出るんだ」
カタダ「楽器か」
エニマル「見ててミソ」

エニマル、ギターを弾く

カタダ「お前……そんなのどこで覚えた？」
エニマル「さっき通りかかりのカート・コバーンって人が教えてくれた」
カタダ「凄いなお前」
エニマル「通りかかりのジョン・レノンで全裸の人が教えてくれたのもあるぞ」

エニマルギターを弾く

カタダ「羨ましい奴だ、なんだか知らんが奥さんはかーくブサイクなんだろうな」
エニマル「奥さんも全裸だった」

カタダ「裸族か」
エニマル「ヌーディストビーチ」
カタダ「エニマル、返してくるんだ」
エニマル「せっかく憶えたのに」
カタダ「家で鳴らしたって意味ないだろう？」
エニマル「じゃあ外で弾くよ」
カタダ「ダメだ、俺達がリンジャと呼ばれている間はダメだ」
エニマル「いつになったら呼ばれない？父ちゃん？」
カタダ「さあな？いつかな」
エニマル「じゃあ呼ばれなくなったら弾いても良いか？」
カタダ「そんな日が来ればな」
エニマル「やったー、じゃあそれまでは……返してくる」

走って出ていくエニマル

カタダ「エニマル……そんな日は来ないよ」

ペンキを持って出ていくカタダ、響くベースの音
ヒンドゥー（無し）がベースの練習をしている、エニマル走ってきてぶつかる

ヒンドゥー「いてえいてえ、しかし俺は超ど級のMだ」
エニマル「ごめんよ、怪しい人」
ヒンドゥー「人を見かけで判断してはいかん、俺のどこが怪しいんだ？」
エニマル「見た目」
ヒンドゥー「ショック」
エニマル「なにそれ？」
ヒンドゥー「ベースだ。そういうお前は何を持ってる？」
エニマル「ギターだ」
ヒンドゥー「そのギターは何をするもの？」
エニマル「返してくるものだ」
ヒンドゥー「どんなものだそれは？」
エニマル「そして音が出る」

エニマル、ギターを弾く

ヒンドゥー「おほ、おほほ」

ヒンドゥーベースを弾く
それは楽曲になる

エニマル「おお、それ凄いな」
ヒンドゥー「おい、お前なんか歌え」
エニマル「俺？」
ヒンドゥー「歌え」

エニマル「おう」

「やっぱり外でやるのは気持ち良い(青姦 青姦)
やっぱりみんなに聞かせてやりたいぜ
父ちゃんにはダメって言われたんだけど(女の子には優しくしないと)
気持ち良くてなにも考えられないぜ(ピロートークがへたくそ)
俺達やリンジャ(うふふふー)
だけど歌いてー(うふふふー)
この歌を世界中に届けたいんだー(いえーーー)
だからつちくらのお茶に決めてます」

エニマル「気持ちいい」

ヒンドウ「すげーなギター」

エニマル「ベースもスゲーよ、誰かに聞かせたい」

ヒンドウ「それは無理さ、危険ってもんさ、俺達に自由は無い、俺達は
天使じゃない」

エニマル「一緒にやろうぜ、バンヤロ。なにこの言葉？自然と出てきた。
バンヤロ！！」

ヒンドウ「バン……やろ？」

エニマル「バンヤロ！！」

ヒンドウ「いいなあその言葉、バンヤロ！！」

トッコ「私も乗るぜ」

エニマル「誰？声！！」

ヒンドウ「誰？」

ドラムの音が聞こえる

エニマル「音だ！！声じゃない！！音！！」

ヒンドウ「誰？怖い！！」

後ろからドラムセットが出てくる、座っているトッコ(無し)

トッコ「私はオープニングの方でドラムを叩いていた者だ」

ヒンドウ「なんか知らんが説明しちゃってるよ」

トッコ「名前はトッコ」

エニマル「名乗った」

ドラムを叩く

トッコ「トッコさ」

エニマル「うん、知ってる」

トッコ「バンやろ、私も混ぜてくれない？」

ヒンドウ「なんだか知らんが、あの、あれ、凄い音を出すぞ」

エニマル「トッコちょっと叩いてみて」

トッコがドラムを叩き、それに合わせるエニマルとヒンドウー

ヒンドウー「歌え、エニマル」
エニマル「うん」

ダンサーが出てきて踊る(教祖、信者)
時折広げる紙にはバンドの現状がコピーとして描かれる

「観客数1000人突破」
「CD売上一万枚突破」
「リンジャ初の快拳」等

「冗談じゃないよ こんな楽しい事をやめろって言うなんて
冗談じゃないよ ひっそりこっそり生きていくなんて
赤を黄色という人がいないように
俺に歌うなんて無茶な事を言う奴はいないのさ

それでも俺から奪うって言うなら
責任者呼んでこい
店長じゃ話にならない
責任者出て来いや
男の中の男出て来いや

冗談じゃないんだ なんて楽しいんだわかってくれるかい
冗談じゃないよ 身体が無条件に動くんだ楽しい
空を狭いという人がいないように
これを聞かないなんて無茶なこと言う奴はいないのさ

それでも踊らないって言うんなら
責任者出て来い
支店長はリストラされた
責任者出て来いや
男の中の男出て来いや」

エニマル「ライブって楽しいなヒンドウー」
ヒンドウー「見ろよエニマル、みんな見てるぜ」

大歓声。
暗転。
スクリーンに映像(以下映像)

レポーター「今話題のバンドニューセレクションが活動しているといわれる場所に
やってきました。なんとこのバンド、メンバーが全員リンジャらしいのです。

社会現象となっているこのバンドに人々の間ではいろいろな憶測が飛び交っています。今や政府さえ無視できなくなってしまった蠅の王様を直撃したいと思います。こちらのライブハウス、BLOCHっていうんですね。ちょっと入ってみましょう」

和田さん(じゃなくてもいいけどできれば)登場

レポーター「こちらでニューセレクションが活動していると聞いたんですが」

和田「してますね、今若手の中では一番じゃないでしょうか、動員も延びてますからね」

ニューセレクションのグッズを持った若者の映像がちょっとずつ入る

女性1「エニマル最高！！」

女性2「たくさん買っちゃいました！！」

男性「今日CD買ったんで帰って聞こうかなと思います」

カップル男「すごい良かったです、感動しました」

カップル女「連れてきてもらって良かったです」

レポーター「すごい人気ですね、当番組では引き続き彼らを追いたいと思います！！」

映像終わり、舞台上に光。

そこは楽屋。エニマル、ヒンドウー、トッコ、モズク、レポーター(有り)

レポーター「それでは引き続き彼らに直接インタビュー致します」

トッコ「私帰るね」

レポーター「ちょっと」

トッコ「じゃーねー」

レポーター「ちょっと感じ悪いですけど」

ヒンドウー「俺もぬーけた」

エニマル「帰るの？」

ヒンドウー「仕込みの途中なんだ」

エニマル「お疲れ様」

トッコ、ヒンドウーはける

レポーター「あの一」

エニマル「ああ、トッコは子供が15人いるの」

レポーター「多いですね」

エニマル「ヒンドウーはカレー屋さんなんだよ」

レポーター「そうなんですか、で？この方は」

モズク「モズクです！！よろしく」

上手上段、ウラミネ、モービス

ウラミネ「モズク……」

モービス「テレビにリンジャが映ってますよ」

レポーター「あの、お二人の関係は？」

モズク「超照れてれる照れ照れる」
エニマル「友達だ」
レポーター「でも君、リンジャだよね？友達という関係が成り立つのかな？」
エニマル「成り立っちゃ」
モズク「成り立っちゃ」
レポーター「あっそうですか」
ウラミネ「モービス、嫉妬心だ」
モービス「はあ」
ウラミネ「シット！！嫉妬ってのはどうなんだ？こんなもんか？嫉妬しすぎてこうだ！！」

ウラミネ、ズボンびっしょり

モービス「おもらしですか？」
ウラミネ「嫉妬だ、おいモービス」
モービス「このバンド、潰せ」
ウラミネ「お前が言うな、俺が言う、このバンド」
モービス「潰せ」
ウラミネ「そこが言いたい、そこが言いたい」
モービス「おいモービス」
ウラミネ「お前がモービス」
モービス「このモービス、バンド」
ウラミネ「言葉がごっちゃごちゃになっちゃった」
モービス「潰せ」
ウラミネ「それは言うんだ？それは」
レポーター「音楽は楽しいですか？」
エニマル「楽しい、ピエトロ！！ピエトロ！！」
レポーター「ピエトロの部分はわからなかったですけど楽しいんですね」
エニマル「音楽は永遠に不滅です」
レポーター「名言ね」
エニマル「やばい！！こんな名言を残したら引退後に脳をやられる」
レポーター「茂雄に謝って！！実はね、私のお母さんも昔歌手をやっていたんですよ」
モズク「本当ですか？」
レポーター「カノンという歌手でね、今の王子様の誕生際で歌を歌ったことも有るのよ」
エニマル「3月7日！！」
レポーター「よく知ってるわね」
エニマル「俺の誕生日もそうなのだ！！そしてお前の命日も」
レポーター「引き千切るわよ」
ウラミネ「こんな奴と誕生日が一緒とは……」
モービス「この坊主……」
ウラミネ「どうした？」
モービス「いえ、あの顔の痣に見覚えが……まさかーまさかーだよー」
ウラミネ「で？どうするモービス」
モービス「その件、このモービスにお任せを」
ウラミネ「モズクを……マイハニーを傷つけないようにな」

モービス「承知しました」

ウラミネ、モービス去る

レポーター「あれ？ギターを見せていただける？ちよつとごめんね。この紋章ってどこかで……」

スクリーンに文字

「人気とその現象」

走りこんでくる教祖と信者
ビラを撒きながら移動

教祖「皆さんも一緒に真実の愛に触れようではありませんか！！」
信者「リンジャの皆さん、我々にも救いが訪れました」
教祖「エニマル様を信じましょう」
信者「そうです。宗教です。ありがとうございます」
教祖「どうぞ読んでみてください、全てのリンジャに
色とりどりの自由。表現、恋愛、闘争、私には聞こえます」
信者「リンジャの皆さん、さあ立ちあがりましょう。彼はきっとやってくれます。」

教祖が紙を広げるとこう書いてある。

「祝、信者8万人突破」

教祖と信者はける
正和のギターの音が聞こえる
照明薄暗くなり、全員はける。
舞台上に正和が古ぼけたギターを引いている
それは悲しいメロディー
上手よりマルシャッタの娘、千佳出てくる

千佳「いつからでしょうか？遠く風に乗り悲しく優しいメロディーが
夜のとばりに聞こえるようになったのは
私はその音に抱かれずには眠れなくなった。
きっと白馬に馬乗りになってボコボコにして拳を血に染めた
王子様が奏でているに違いない。違いないんです。
ただでもうこのメロディーに甘えるのは終わりなんだわ。
私は嫁いで行くのです。幸せという湖に身を投げて2度とは浮いてこない。
悲しい嬉しい運命」

正和いなくなる、マダムアルファ入って来る

マダム「これはこれはマルシャッタのお嬢さん、いらっしやいませよ。

あれ？ブツブツ言ってる！！怖い、マダムアルファ怖いわ」

千佳「ごきげんようマダムアルファ」

マダム「お嬢さん、マダムで結構ですよ。それにしてもどうしたんです？

この国一番の貿易商の私になにか用ですか？お求めのものでも？」

千佳「マダムにご報告があつて」

マダム「あらなんでしょうね？」

千佳「私、ウラミネ様と結婚する事になりました」

マダム「あら！！これは喜ばしい事だわ。この国の王子様と？まあすごい。

(千佳にビンタして)」

千佳「痛い！！」

マダム「夢じゃないのね」

千佳「ご自分でお確かめになったら？」

マダム「こんなに小さかった豆タンクが、いやさ、お嬢様がもうお嫁に行くなんてね」

千佳「それでね、マダム。マダムに預けていた我が家に代々伝わるギターを

嫁入り道具にしようかと思って取りに来たんです」

マダム「あら？そんなものあったかしら、最近めっきりと忘れっぽくなってしまつてね。

正和！！正和どこにいるんだい？」

正和入ってきて

正和「なんでしょう？」

正和と千佳目が合う、音楽が流れる良い雰囲気

千佳「……………気持ち悪い」

正和「ええー！！」

マダム「モズクがどこに行ったか知ってるかい？」

正和「多分例のお友達の所かと思います」

マダム「探して連れてらっしやい！！」

正和「はい、マダム」

正和はけようとする

マダム「あっ、違った、用件間違つた。正和！！正和！！」

正和「なんででしょう？」

マダム「なんででしょうじゃないわよ。あんたマルシャッタ家から預かつた

ギター知らないかい？」

千佳「うちの紋章、そう、このような紋章が入っていると思うんですけど」

マダム「あれ？どっかで見たねそれ」

正和「知りません」

マダム「私は最近見たような気がするんだけどね」

正和「気のせいでしょう、私は知りません。存じません。断固反対です」

千佳「そんなに否定なさらなくても」

正和「お嬢さん、残念ながらそのような物はこのアルファ家にはございません。
失礼ですがお引取りを」

エニマル、モズク走ってくる、手にはギター

エニマル「わー」
モズク「わー」

正和、エニマルを殴る

正和「バカ野郎！！」
エニマル「なんだよ」
モズク「酷いわ！！正和」
正和「来るな、こっちへ来るな」

正和、エニマルをぼこる

モズク「つかこーへー！！」
正和「帰れ！！」
エニマル「バーカバーカ！！」

エニマルはける

モズク「正和のわからずや！！田村！！田村！！」

モズクはける

マダム「どうしたんだい？正和」
千佳「………かっこいい」
正和「ええー！！」
マダム「バイオレンスに憧れるお年頃なのね」
正和「そういう事ですので今日の所はお引取りを」
千佳「あなた、(まじまじと見て)リンジャなのね。お名前は？」
正和「正和です」
千佳「私は千佳、千佳マルシャッタよ」
正和「へえー」

音楽流れる、すばやく場転
エニマルとモズク

エニマル「ちくしょう、あのやろー。やってやる」
モズク「賛成だよ、やってやるの賛成」
エニマル「イタ電からな」
モズク「からね、イタ電からね。そんな小心者なエニマルが大好き」

教祖「私も好きです、大好きです」
教祖と信者出てくる

エニマル「誰？」
教祖「エニマル様」
エニマル「やめてよ、様をつけないでよ。くすぐったい」
教祖「サマサマサマサマー♪サマサマサマサマー♪」
エニマル「やめてよ、嫌がらせはやめろー」
信者「教祖、やり過ぎですぞ」
モズク「教祖？あなた宗教なの？」
教祖「宗教なのっておかしいけどね。申し遅れました。
私勝手ながらこのような事をやらせていただいております」

信者、名刺を2人に渡す

信者「ニューセレクション教です。こちらが教祖の慢画太郎です」
教祖「どうぞお見知り置きを」
モズク「ニューセレクション教？」
信者「ナイス疑問系！！ナイス！！教祖はあの方ですが、神様はエニマル様です」
エニマル「くすぐったい」
教祖「信者、神様ノートに書いておけ、エニマル様は様をつけるとかくすぐったいらしいよ
って」
信者「はい！！」
エニマル「キチガイだ」
教祖「私は聞いたんですよ。ニューセレクションのCDを聞いて神の声を。
エニマル様の声を、この私だけが！！」
モズク「私も聞いたよ、エニマルの声」
エニマル「あ—————」
モズク「これでしょ？」
教祖「ちがーう！！そんな単純じゃにゃーい！ 予言ですよ。予言を聞いたんです。
全てのリンジャに希望を！！光を！！そして自由を！！」
信者「ナイス！！ナイス宗教によくありがちパターン！！」
エニマル「そんな事言った事ないよ」
信者「ニューセレクションの人気は不動のもの。そして私の宗教も
今や信者8万人を数える事となりました。そしてその全てがリンジャ。
すばらしい！！結束力ってこう言う事！！」
モズク「ようするにあんたさ、エニマルの人気を利用して宗教作ったの？」
信者「失礼な、あやまれ、画太郎先生にあやまれ」
教祖「お嬢さん、いや、マリア様」
モズク「モズクだよ」
教祖「もはや事はそんな段階ではにゃーい！！エニマル様は我々の希望だ。
それを我々から奪う事は誰にもデキない。にゃーい！！」
信者「ナイス！！教祖であるが故の壊れっぷり！！」
エニマル「あのさ、もしかして俺のファンなの？」

教祖「エニマル様、私はそんなレベルじゃないんですよ」
エニマル「どうでもいいけど、あんまり人に迷惑をかけちゃダメだよ」
教祖「その言葉を私めに？いただきましたー。ありがたいお言葉いただきましたー」
信者「！！メモを、あんまりヤキソバにマヨネーズかけちゃダメだよ」
エニマル「そんな事言ってないよ」
信者「あんまりフリーダイヤルに電話かけちゃダメだよ」
エニマル「全然違うよ」
モズク「エニマル行こう、この人たち怖い」

モズク、エニマルを引っ張ってはける

教祖「待ってくださいよーエニマル様ー」

はける2人、舞台上には国王とモービス

国王「その話本当であろうな？」
モービス「ええ、間違いありまへん、ちゃんと調べさせましたさかいに」
国王「キャラをいきなり変えるのはやめろ。絡みを考えろ」
モービス「おおきに」
国王「物事は忘れた頃にまた巡って来るものだな。そうか、あの子が」
モービス「運命でございましょうか？」
国王「運命などと言うものは弱いものが信じる言葉だろう？」
これは事故だよ。事故みたいなもんだ。いや、運命だ」
モービス「いってんじゃないから」
国王「で、ウラミネがそう言ったんだな？」
モービス「ええ、あのモービスをバンド、と」
国王「意味がわからんな」
モービス「そして潰せと」
国王「わからん」
モービス「すり潰して適量の塩、酢、醤油を加えて良く混ぜた物を
衣に包んできつね色になるまで揚げろと」
国王「ようするにそのバンドを潰せ、そう言ったんだな？」
モービス「お察しの通りで」
国王「構わん、もう遠い昔の事で実の子の事など忘れておったからな。
ウラミネの言う通りに」
モービス「それと調べている間にもう一つわかった事があるんですが」
国王「国生さゆりの休日の過ごし方か？」
モービス「残念ながら違います。エニマルを育てたのは、あのカタダです」
国王「何ー？あのカタダ！！」
モービス「25年前」

音楽流れ、照明変わる。カタダ入って来る

カタダ「国王！！」

国王「カタダか？外務大臣のお前がこの俺に話があるとはどういう風の
吹き回しだ？吹き返しおって」
カタダ「国王、先日もリンジャが無実の罪で死刑に」
国王「なんだそんな事か？日常茶飯事ではないか。それがどうかしたのか？
ええ？またしてもくだらんヒューマニズムを振りかざす気ではないだろうな？」
カタダ「制度を廃止しましょう、マークにはなんの意味もない」
国王「秩序だ、秩序を作らんといけないのが私の勤めだ。バランスを
作らないといけないのだよ。強者がいれば弱者がいる、7に対しては
3が必要だ、サラリーマンのたしなみだ。それを国家が制御する。
秩序が作られる。わかりやすい。至極単純だ」
カタダ「それは人間が作る事じゃない」

上手に教祖

教祖「神様が決める事だ」
カタダ「おい、お前、何言ってんだよ誰だよ」
教祖「あっすいません」

教祖はける

カタダ「彼の言う通りだ」
国王「困るなあ、カタダ。一国の大臣がそんな危険思想を持ちやいけないよ。」
カタダ「私は一人の人間としていっているのです、国王も一人の人間として聞いてください」
国王「私も人間だが、俺とお前は違う、俺とお前さえ違うのだ。人には差が出来るのだ。
いかな、カタダ。お前は昔から少し考えすぎる嫌いがある。当たり前事に抗うのは
大きな代償を払わねばならんのだぞ」
カタダ「あなたは変わってしまった」
国王「変わってなどいない。お前に何がわかる？昔も今も何も変わりはないのだ。
そしてこの先もなにも変わりはない」
カタダ「変わるのが怖いのでしょうか？私は他の国で見ました、リンジャと国民と一緒にバレーボールを
しているのを」
国王「何かの見間違いだ」
カタダ「目をそむけるのですか？あなたは国王になったその日から何も見ようとしていないではないで
すか」
国王「カタダ、お前は私の親族になる男だ。私の妻の妹と結婚するのだろうか？聞かなかったことにして
やるから下がれ」
カタダ「国王、歪んだ思想はいずれ破綻する事になりますよ。それでもいいんですか！？」
国王「聞かん！！下がれ！！モービス！！そいつを締め出せ」
モービス「りょうかいでおま」
国王「お前とは一生交わる事がなさそうだな」
カタダ「国王！！あんたいつか後悔するぞ！！後悔するぞ！！お前の恥ずかしい
プライベートショットを公開するぞ！！」

スクリーンに国王の恥ずかしいプライベートショット

カタダ、モービスに連れられてはける

国王「そして、今！！今になってカタダか」

モービス戻って来て

モービス「どうしましょうか国王？」

国王「構わん、リンジャに成り下がった元エリートに何ができる？
なにもできんさ。心配するな」

妃「あなた～」

妃出てくる

国王「なんだお前か」

妃「あなた、何の話をしていたんですの？」

国王「昔の話さ、それでなんか用か？」

妃「ウラミネが見当たらないのですけど」

国王「ウラミネはマルシャッタの娘とデートだ」

妃「まあ、話が進みますのね」

国王「順調だよ、何事も」

妃「それとちょっと立ち聞きしてしまったんですけど、エニマルとは何者ですの？」

モービス「奥様！！」

照明別のところへ

国王、妃、モービスはける、千佳とウラミネ入って来る

ウラミネ「なんだよ、ここ？」

千佳「ウラミネ様ご存知じゃなくて？バンドの殿堂BLOCHですわ」

ウラミネ「(客を見渡し)見たところアホな顔したリンジャばかりじゃないか」

千佳「今日は大変人気のあるバンドが出演するらしいですわ」

ウラミネ「人気とはこのウラミネよりもか？そんなわけない俺、王子！！」

やれやれ、せっかくのデートだというのに」

千佳「私一度来て見たかったの」

ウラミネ「今日は護衛もいないってのにこんな物騒な」

教祖と信者出てくる

教祖「エニマル様ー！！」

信者「出てきますよ！！」

ウラミネ「アホだ、アホがいる」

エニマルらの声

エニマル「今日は来てくれて本当に嬉しいのー」
ヒンドウ「今日は物販の方でカレーを出してます」
ウラミネ「このバンド……」

歓声

トッコ「私かい？私はトッコさ！！」

歓声

エニマル「それじゃあ聞いてくださいー曲目」

曲が流れる

ウラミネ「押すな、押すな馬鹿者！！俺を誰だと思ってんだ！！
千佳さん、こんな物騒なところは早く出ましょう、千佳さん？」
千佳「あのギター！！あのギター私のよ！！間違いないわ」
ウラミネ「あのギター？あいつらは盗人ですか？そうなんですか？」
千佳「きゃーカッコいい！！トッコー！！トッコー！！」
ウラミネ「おい！！押すな押すな」
千佳「あれ？あのギター……」
ウラミネ「盗まれたんですね？そうなんですか？」
千佳「きゃーカッコいいトッコー！！」
ウラミネ「おい！！女！！」
千佳「ウラミネ様、お願い、取り返して」
ウラミネ「リンジャの癖に人様の物を取るとはゆるせん」

歓声に包まれる会場

ウラミネ「行きましょう！！」
千佳「はい」

ウラミネ、千佳はける

教祖「いや、凄かったねー、やっぱりあのギターソロがね」
信者「いや、ヒンドウのベースもなかなか」

バンドメンバー、モズク入って来る、楽屋

教祖「お疲れ様で一す、エニマル様」
モズク「またいるよ、この人達」
ヒンドウ「カレー食べてってね」
信者「もちろん食べますとも、2杯はいけますよ」

エニマル大事そうにギターを拭いている

トッコ「あんた、それ良いギターだね。なかなかリンジャが手に入れられるものじゃないよ」

エニマル「うん！！」

モズク「これね、私があげたんだよ、ね？エニマル」

兵1、2入って来る

兵1「ヘイユー、この盗人が！！」

エニマル吹っ飛ばされる

教祖・信者「エニマル様—！！」

兵2「はい！！動くな動くなよ。ギターが盗まれたとの通報が入った」

兵1「これだな」

エニマル「触るな」

兵1「動くなっつーの」

吹っ飛ばされる

教祖・信者「エニマル様—！！」

兵2「おいおい、リンジャの癖に大変な事してくれたな。人様のギターを盗んで

我が物顔で弾いている。好きなあの子の縦笛を我が物顔で舐めている。

ふざけんな！！」

ヒンドウ「おいおい！！どこにそんな証拠があるんだよ！！」

兵1「この紋章はな、由緒正しきマルシャッタ家のものだ。間違いない。

間違いないんだよバカ野郎。ゴールマッ！！ゴルマは関係ねーけどよ！！

この紋章が証拠だ、お前らよりによってだ。ウラミネ様の婚約者に

なる御方のものを盗むなんてただで済むと思うなよ」

エニマル「盗んだんじゃない貰ったんだ」

兵1「嘘をつくな！！」

ウラミネ、千佳入って来る

ウラミネ「嘘吐きは泥棒のはじまり、そして終わりは始まりっていうけど

本当らしいな」

モズク「あー、いつかのバカ王子」

ウラミネ「ぬぬっモズク」

兵1「お嬢様、間違いないですか？間違いないですわ、そうですか」

ウラミネ「何故一人芝居を？」

千佳「間違いないですわ、この紋章、我がマルシャッタ家のものです」

ウラミネ「盗んだのはお前か？」

エニマル「盗んでない」

ウラミネ「いや、盗んだんだ」

トッコ「盗んでないって言ってるじゃないか」

ウラミネ「黙れ！！お前らにもものを言う権利があると思うな。

俺が盗んだと言ったら盗んだんだ」

モズク「違うよ、私があげたんだよ」

ウラミネ「モズクが言う事ならば本当かもしれんが……信じてやりたい感丸出しだが、丸っと出ちゃったが」

千佳「ウラミネ様！！」

ウラミネ「しかし、リンジャが人のものを使って我が物顔と言うのは罪に与えする」

モズク「私があげたんだ」

ウラミネ「モズク黙っててくれ、お前はこちら側の人間だ。お前をあれするのは本望ではない、おい」

兵1「はい」

ウラミネ「ギターを回収しろ」

兵1「はい」

エニマル「やめろー！！」

ウラミネ「近寄るな野蛮人」

兵2に止められるエニマル

ウラミネ「本来ならば死刑にしてやるどころだがモズクもこう言っているしな。

バンドの活動を停止しろ、これが最大の譲歩だ。

お前らに活動の場は与えん、もっともギターがなければ何もできんだろうがね」

兵2「優しいなあウラミネ様は」

ウラミネ「そうだ俺は優しい、そしてこんな風に小粋なダンスもできる」

エニマル「それは俺が貰ったんだ、俺のだ」

ウラミネ「あんまり聞き分けがないとさしもの俺も怒るぞ」

エニマル「返せバカ！！バカ！！」

ウラミネ「文句だけはいっちょ前に言えるのだな、何も出来ないクセして。

お前と俺は違う、生まれも育ちも地位も財産もなにもかも！！俺とお前は違うんだよ」

千佳「トッコさんサインください」

トッコ「空気読めよ」

ウラミネ「まあリンジャはリンジャらしくってこった。あっはっはっはっは」

モズク「最低やろう」

ウラミネ「モズク、俺も本望ではないんだ。だけどお前の為に譲歩したのさ」

モズク「クソやろう」

ウラミネ「リンジャと付き合うと言葉遣いまで……嘆かわしい。

モズク帰るんだ、おい連れてけ」

兵1、2モズクを連れていく

モズク「やめろ離せー」

ウラミネ「行くよ、千佳さん」

千佳「はい」

エニマル「モズクー！！」

ウラミネ、エニマルに刀を向け威嚇

ウラミネ「汚いリンジャが！！あっはっはっはっはっは」

はける

信者「ひどい奴らだ、これだからマークのついた人間と良純の天気予報は信用できないんだ！！」

ヒンドウ「おつかれー！！終わったな俺たち」

エニマル「ヒンドウ？」

ヒンドウ「だってさっきの奴見たことあるもんよ、この国の王子だろ？

あんな奴に目をつけられたら終わりだろ、そう思うだろ？」

トッコ「同感だね」

教祖「だからって解散しないっしょ！！しないよね？信者たちにどう説明しましょーか？

この事態！！」

ヒンドウ「あきらめろ、お前がギターを盗らなかったらこんな事にはならなかったんだ」

エニマル「盗ってない、貰ったんだよ」

トッコ「帰るよ」

信者「まあまあまあ」

ヒンドウ「そうだな」

エニマル「待てよ、待ってよ」

ヒンドウ「離せよ、お前のせいで俺まで目つけられたらカレー屋まで

潰れちゃうだろ」

トッコ「私もさ、あんたらもだけどリンジャなんだ。ただでさえ15人も育てるのつらいんだ、わかってよ」

ヒンドウ「じゃあな」

トッコ、ヒンドウはける

エニマル「ばんやろ！！ばんやろ！！本当はどこに行ったんだよ？

本当ってのはこんなにも脆いものなのかよ。

本当ってちっちゃいのか？

本当が足元をころころと転がってソファの下に

消えちゃった……」

エニマルがっくりと肩を落とし、ゆっくりとはけようとする

教祖「エニマル様！！チャンスですよ」

エニマル「これのどこがチャンスなんだよ、ピンチのど真ん中ストレートじゃないか」

教祖「やるなら今しかねー♪やるなら今しかんえー♪

今ですよ、今この瞬間こそが全てのリンジャたちの為に

立ち上がる時ですよ。万事、物事を決めるのは国王じゃない、

神様だ！！エニマル様！！」

信者「ナイス！！キチガイっぷりだよ！教祖」

教祖「アンドーナアアアアアツ！！」
信者「アンドーナツをこんなに絶叫した人を見たことが無い」
エニマル「俺は神様じゃないんだ」
教祖「私にとっては神様です、いや、私だけじゃない、そして彼もその他8万人の信者に
とつても！！神様！！正しい戦争をしましょう、世界を綺麗にしましょう！
自由は待っていても全然やってこない！！正しい戦争を！！」
信者「教祖らしい事を！！」
エニマル「正しい戦争？」
教祖「正しい戦争です、ボコボコのアスファルトを真っ平に！！」
エニマル「俺は何も知らないんだ」
教祖「決断を！！」
信者「決断を！！」
エニマル「みんな幸せになれるかな？」
教祖・信者「決断を！！」
エニマル「俺は何も知らないままに、本当に何も知らないで」

エニマル、舞台上にあるボタンを押す

エニマル「そのボタンを押したんだ」

警報が鳴る、音楽
エニマル、信者はける

教祖「さあ、祭りだ、眠っていた8万人の足音を聞け！！
もう蒸し暑い夜も我慢しなくていい、多い日も安心！
君だけが悪い子じゃないんだ、みんなが悪い子なんだ。
悪い子が減ってももっと悪い子が増えるんだ。
だから我慢しなくていいんだよ
自由への扉の鍵はもう壊れかけている」

走り去る教祖
入れ替えに入ってくる、妃、国王、モービス、千佳、ウラミネ

国王「優しいなお前は私ならその場で、この研ぎ澄まされた手刀でそいつの首をはねて
いた事だろう」
ウラミネ「わざわざ手を下すまでも無いさ、出てきたら打てばいい、リンジャは打てば
いい音が鳴るよ、リンリーンて。モービスお前がやらんから俺が自らやった
んだぞ」
モービス「申し訳ございません」
国王「最近は何しからんリンジャが多いな、もっと法律を重くせにやいかんな、な、
ナツツ、な」
千佳「それにしてもウラミネ様が勇敢で助かりましたわ、それはもう勇敢でしたの。
テレビ欄も夕方6時以降しか掲載されてませんでしたのよ」
国王「夕刊違いだな」

一同「(妃以外笑う)」
千佳「あら、わたしたったら、違いますのよ。勘違いですよ」
ウラミネ「ユー・勘違いだな」
国王「おー、うまい」
一同「(妃以外笑う)」

上手からものすごい音

モービス「なんでしょうか？」

兵1, 2ともみ合いながらモズク入ってくる

モズク「返して、ギターを返して」
兵1「いうことを聞きなさい」
モズク「嫌だ、言うことは聞かない主義なの」
兵2「なんて勝手な」
ウラミネ「これはこれはモズク」
モズク「これはこれはじゃねーよ、5足歩行人間！！」
国王「5足歩行？気持ち悪い！！」
ウラミネ「お前たち、離してやれ」

解放されるモズク

ウラミネ「さあこっちへおいで」
モズク「ガルル」
ウラミネ「モズク、さあ怯えないで」
モズク「ギターを返して」
千佳「これは私のよ」
モズク「泥棒」
千佳「どっちが」
ウラミネ「まあまあ、俺の為に争うな」
国王「ユー・勘違い」
モズク「それはエニマルのよ、返して」
千佳「マークがついてても、こんなに野蛮な方もいらっしやるのね。
勉強不足ですわ」
モズク「返して！！」

モズク、千佳につかみかかる
それを静止するウラミネ、モズクを抱きしめる

モズク「な！！離して」
千佳「ウラミネ様？」
ウラミネ「あのへちゃむくれのどこがそんなにいいのだ？」
モズク「あんたなんかよりよっぽどいいわよ。エニマルが腕時計なら

あんたなんか腹時計よ」
ウラミネ「なんだと！！」
モズク「いいから返して！！」

千佳ともみ合いになるモズク

モズク「泥棒！！泥棒猫！！」
千佳「泥棒猫はあなたよ！！」
国王「猫？猫……キャットファイトだ……」

モズクギターを奪い

モズク「あんたたちなんて持ち株が高騰しちゃえばいいのよ！！」

モズク逃げる

兵1「持ち株が高騰？」
兵2「いい事じゃないか」
ウラミネ「お前たち何をやってる追え、追わないか」
兵1「はい」

はける兵1, 2

国王「マダムアルファの娘にも困ったものだ」
千佳「ウラミネ様」
ウラミネ「なんだ？」
千佳「あの娘のことが好きなんですか？」
ウラミネ「好きだが、それがどうした」
モービス「ウラミネ様、まずいですよ」
千佳「国王様、私今のままじゃ結婚なんてできません」
国王「心中お察しするよ」
ウラミネ「愛が無くても結婚はできるさ」
千佳「失礼いたします、ごきげんよう」

千佳はける

モービス「ウラミネ様追いかけたほうがよろしいのでは？」
ウラミネ「なぜだ？」
モービス「乙女心は複雑なのですよ」
ウラミネ「そうなのか、おい千佳さん、待ちたまえ」

ウラミネはける

国王「なんだか知らんが待ちたまえ」

国王はける、取り残される妃とモービス

モービス「……待ちたまえ」

はけようとするモービス

妃「モービス」

モービス「は、はい」

妃「相変わらず私に対してだけ怯えた眼をするのねモービス」

モービス「いいえ、滅相も無い」

妃「最近は特にひどい、そんなに怯えた目をするなんて……」

ウラミネが生まれてすぐの時もそうだったわ。

モービス、私に何か隠してるでしょう」

モービス「いいえ、妃」

妃「お言い！！」

モービス「こればかりは言えません」

妃「やっぱりなにか隠しているのね」

モービス「しまった」

妃「わかりましたモービス、大人の取引をしましょう。

あなたを私の権限でクビにするか！！言うか！！どちらか！！」

モービス「そんな一方的な、大人の取引って言ったのに！！」

妃「さあ、どうするの？」

モービス「……しかし」

妃「しかしもかかしくも無い、この世にかかしなんてものは無いのよ！！」

モービス「ありますよ」

妃「今言えば怒らないから、今言わなければ一生怒り続けるわ。

怒りの永久機関になるわ」

モービス「じゃあ怒らないで聞いてくださいよ……25年前」

モービスの話を聞きながら顔にホクロをつける妃。

照明変わり、モービスはける

妃「あなた」

カタダが下手から

カタダ「うわ、おばけ！！」

妃「失礼ね、私はお化けじゃないわ」

カタダ「おばけだよ、25年前に死んだ人間が出てきたら

それはもうおばけなんだよ、かわいく言えばおばキューなんだよ」

妃「まあかわいい、久しぶりねあなた。老けたわね」

カタダ「当たり前だ、時間が止まってるのはお前だけなんだからな」

妃「その間になにか変わって？」

カタダ「なにも変わらないよ」
妃「そう？あなたの望んでたようにはならなかったのね」
カタダ「俺の望み」
妃「ねえ？あの子は元気？私の子」
カタダ「あ、ああ元気だよ」
妃「大きくなったんでしょうね」
カタダ「小さいよ、最近あいつギターなんか貰ってきやがって。
俺は返せっていったんだけど影でコソコソと……」
妃「(首を振って)違うわ」
カタダ「え？」
妃「私とあなたの子はウラミネよ。そうでしょ？あなた」

スクリーンに「ENIMARU」
文字が組み変わっていく
「URAMINE」になる

カタダ「わかってるさ、わかってる。忘れてたよ。
忘れようとしてたよ、忘れられるはずなんて無いのにな。
消えることは無いのにな。それでも血が出るまで
こすって消そうとしてたんだ。
でも25年前のお前は、真実しか知らないのな」

警報が鳴る
カタダ、妃はける。信者が出てきたマダムアルファを縛り上げる。
信者が上手に。

信者「さあ、祭りがはじまりましたよ。大きな花火が今打ちあがりました」

教祖がエニマルを肩車して走り回る

マダム「なんだいあんた達、何が目的だい？」

信者、マダムのマークをはずして握りつぶす

マダム「何するんだい？あんた！！正和！！正和はどこだい！！」

信者「うるせー！！これでもう同じステージだな」

マダム「なんだって？」

信者はける、入れ違いにレポーターは入ってくる

レポーター「大変です、こちらマダムアルファ邸前。多くのリンジャによって
マダムアルファの貿易用倉庫から数多くの武器が持ち去られた模様です。
気分はどうですか？」

マダム「良いわけないじゃないか！！」

リポーター「この方リンジャの癖にたいそうな口を利きますね、お仕置きです」

マダムアルファに蹴りをいれるレポーター

マダム「何するんだいあんた？私はリンジャじゃない(蹴りが入る)」

リポーター「だってマークがついてないじゃないですか？

それ以外にどうやって証明するんです？

そんな頼りないものに頼ってるからそうなるんですよ」

マダム「あんただってつけてるじゃないか」

リポーター、マークを自ら外しくしゃくしゃにする

マダム「何するんだ？あんた何をしてるんだ？私はもう許容量超えちゃったよ」

レポーター「奪われるなら最初から持ってなければいいんですよ。

そうすれば奪われる必要もないでしょ？」

マダム「なんて理屈だい」

レポーター「さあ、私はリンジャですよ、仲間です。情報をください」

信者は入ってきて紙を渡しはける

レポーター「新たな情報が入りました、8万人を超えるリンジャによって

一般市民のマークが次々と奪われている模様です」

マダム「何てことだい！！」

レポーター「リンジャの集団のリーダーから声明が入ってきました。

我々は、本日を持って自由になるとのことです。

数々の恨みを持ったリンジャが一般市民に暴行を加え

背骨を矯正し、財産を奪い、温かいお茶を配り、

小倉智昭のランドクルーザーを奪っているとの事です。

以上、リンジャ初のレポーターがお伝えしました」

レポーターマダムに手を差し伸べる

マダムその手をつかむ、2人はける

教祖に担がれたエニマルがはいってくる

エニマル「おろせー！！おろせー！！」

エニマルおろされるやいないや、掴み掛かる

エニマル「やめさせろ」

教祖「神様、気でもふれましたか？」

エニマル「気が触れてんのはお前だ、物を奪うのをやめさせるのだ！！

暴力をやめさせるのだ！！」

教祖「神様、神様までわれわれに強制を、圧力を。全てはあなたが

望んだことなのに」
エニマル「こんなこと望んでない」
教祖「もう止まりませんから、私たち、人間なんです。
混乱はすばらしい、秩序ができる前の第一段階。
破壊！！破壊！！破壊！！」
エニマル「神様やーめた！！やめさせないと！！」

エニマルはける、教祖も追いかける

国王、モービス、妃が入れ替わりに

国王「どうなってるんだ！！いったいどうなってこうなって」
妃「あなた……話は全部聞きました」
国王「何のことだ？」
妃「私の子供、私のベイビィ」
国王「そんなこと今はどうでもいい、関係のないことだ。
モービス、お前かいらんことを言ったのは」
モービス「それが関係なくないですよ。リンジャの集団の実質的な
リーダーはエニマルです」
国王「なんだと？本当か？」
妃「大物に育ったのね」
国王「流暢なことを言ってる場合か、モービス、軍隊を出動させろ。
首謀者を殺してもかまわん」
妃「あなた」
国王「こんなことになるなら生かしておかなければ良かったんだ」
妃「わが子を」
国王「その我が子が、今わたしに牙をむいているんだ！！
モービス、軍隊を」
モービス「本当によろしいんですか？」
妃「しょうがないわよ、受け入れましょう。積年の罪を
受け入れましょうあなた！！」
国王「軍隊を！！」
モービス「かしこまりました」
妃「あなた」
国王「我が子を！！エニマルを殺してもかまわん！！」

爆発音が遠くで鳴り響く、3人がはけた後、
下手でギターを静かに弾いている正和
そこに入って来る千佳

千佳「ちょっと何？何が起こってるのかしら？それとこの懐かしいメロディーは何？」
正和「お嬢さん」
千佳「あっ、あなた」
正和「マークをつけてうろうろするのは危険ですよ。自分の国にお帰りなさい」

千佳「ねえ、今の音を鳴らしてたのはあなた？」

正和「ああ、これですか？」

千佳「もう一回、もう一回聞かせて頂戴。ミニにタコが出来るぐらい聞きたいの。
ミニにタコが出来るぐらい」

まさかず頷いて曲を引く、横に座る千佳
曲が流れている間にウラミネ上手から。

ウラミネ「モズク、千佳さんどこだ？なんだこの音は？ん？

なんだこの光景は？リンジャが暴れている。恋に限らず
なにかもの邪魔をするかリンジャ！！（刀を抜いて）この俺を怒らせたな。
全ての兵士に告ぐ、私が先頭に立つ。ついてくるのだ」

ウラミネが去る。後を追うように横切る兵士。

千佳「あなたはリンジャなのにキレイね、きれいな人にしかできない事があるもの、
あなた本当にリンジャ？」

正和「リンジャでもきれいな音は出せるんですよ。音は平等です。常に、世界もそうあって欲しいと私
は思っていました」

千佳「そうはならないわ、この世界はハンデ戦ですもの。世界はハンデ戦、リンジャは悪役。
悪役が負けるとね、子供が喜ぶのよ」

正和「しかし、偶像のヒーローはいずれ地に落ちる。いずれあなたもわかるでしょう」

正和去ろうとする

千佳「ちょっとあなた、私を一人で置いて行く気？」

正和「私はリンジャですが、ついてきたいならどうぞ」

2人はける

それぞれの袖から教祖、信者と兵1、2が出てきて対峙する
舞台上をくるくると回る。
そこに走りこんでくるモズク、ギターを抱え

モズク「エニマルー！！エニマルー！！ギター取り返したなりそねー」

走りぬけるモズク

教祖、信者、兵1、2。がごちゃっと固まり、その後ろからウラミネが現れる
散り散りになるその他4人
ウラミネ歌う、その他4人踊る

「人々は国内で争って殺しあう
この俺がなんとかせねば
この国の秩序が保たれない
さあ、マークを掲げ

前進あるのみ
さあ、マークを掲げて
この国を、この世界を
この手で治す手術をせねば」

モズク逆方向から走ってきて(2段目)、下を走るエニマルを見つける

モズク「エニマルー！！」
エニマル「モズクー！！」
モズク「受けとって！！」

モズクが投げたギターを受け取るエニマル

モズク「歌うのよエニマル」

ウラミネパート

「さあ、マークを掲げて
有象無象の混乱を
キレイに丸く治めるのだー」

エニマルパート

「人間同士で争うなんて
大切な物が壊れる前にやめるんだ
壊れた物は同じ形には戻らない」

カタダ走ってきてエニマルに飛び蹴り
その他は散り散りにはける

エニマル「なにすんだ父ちゃん」
カタダ「本当か？」
エニマル「なんだよ父ちゃん」
カタダ「お前がリーダーなのか！！」

リポーターがクルクルとその周りを回る

リポーター「次々と死傷者が出ています、一般市民一万人、リンジャー万三千人、水道トラブル五千円」

エニマル「違うんだ父ちゃん」
カタダ「目を逸らすな、これがお前がしたかった事なのか？お前がこれの引き金を引いたんだ」
リポーター「どんどん増える死傷者が公園の噴水で山済みになっています。
どれがマークをつけていたのか？つけていなかったのか？わからない状態です」

エニマル「違うよ！！俺は止めたんだ！！」

カタダ「もうお前には責任があるんだ、歌う事は誰にでも出来る。だが！！それが伝わらな
き
や雑音に過ぎない」

リポーター「わーお目の前で人が木っ端微塵」

リポーターはける

エニマル「父ちゃん俺にできる事は？教えてよ」

カタダ「歌え、全ての人にその歌を聞かせてやれ、お前のそのソウルフルサウンドで人々の魂を揺さ
ぶってやれ」

エニマル「とうちゃんがその時が来るまではダメだっていたんじゃないか」

カタダ「今がその時だよ、エニマル。行って来い」

エニマル「わかった」

エニマルはける。

カタダ「国王、見てるか？ウラミネは恨みの根、25年にしてその花が咲くとは」

カタダ後ろの箱に次々とランダムに模様を書く

同時に国王、モービスと共に上手上段

国王「まったく収まる気配がないじゃないか、モービスどうなってる？」

モービス「マークを取られた人間がリンジャの側につき始めました」

旗を振りながら出てくるマダムアルファ

マダム「あっはっはー、凄い世界だよ、普通を1としたら0.5の状態だ。

この状態をなんといおうか、この区域はもう、そうだね。

0.5だからテングク、テングクだよ」

兵1.2とウラミネが刀を振り回しながら出てくる、兵2だけチクワ持つてる

ウラミネ「減らない、減らないぞ。モズクー！！千佳さーん！！」

兵1「次から次へともうワニワニパニック！！」

兵2「斬れない、斬れない」

ウラミネ「お前はなんだ！？もう帰れよ！！役立たず」

兵2「しゅーん」

国王「エニマルは？エニマルは見つからんのか？」

モービス「現在搜索中です」

国王「見つけ次第、殺してさせ！！それしか方法はない」

モービス「本当にそれでよいのですか？」

国王「それしか方法はない」

モービス「お言葉ですが王様！！本当にそれしか方法はないのですか！！」

国王「本当にそれしかない！！本当にそれしかないのか？それしかないのか？

カタダ！！お前なら知っているのか？」

ウラミネ「くそー、斬っても斬ってもきりが無い、斬っても斬っても金太郎」

教祖、マークだらけの身体になり入って来る

教祖「見てこれ、マーク！！マークだらけ！！私が一番偉い」

兵2「チクワウまーい！！」

教祖「ウーピーゴールドバァーグ！！」

正和、千佳、走りこんでくる

教祖「ややっ！！マーク発見！！」

正和「こっちですよ」

教祖、千佳を捕まえてマークを奪い去る

千佳「きゃあ！！」

正和「お嬢さん！！」

ウラミネ「この一糞リンジャー！！」

ウラミネ振りまわした剣先で千佳をぶった切る

静かになる周囲、千佳だけにサス、ゆっくりと踊るように倒れる。

その間に国王、モービス、マダムははける

照明戻る

正和「千佳さん！！」

ウラミネ「なぬー！！」

千佳「正和……………」

ウラミネ「違う違う、マークがないもの。千佳さんじゃあない、行くぞお前達」

兵1「しかし」

ウラミネ「マークのついてないものは斬ってよい！！行くぞ」

兵1、2「はい」

カタダ振りかえり、ウラミネに寄っていき、行き場を塞ぐ

兵1、2ははけている

ウラミネ「誰だ？あんた？どっから湧いて出た？」

ウラミネをぶん殴るカタダ

ウラミネ「貴様！！リンジャの癖に！！」

また殴る

ウラミネ「なんだよ、親父にも殴られた事がないのに！！」

カタダ「ばかやろう！！俺が親父だ！！」
ウラミネ「何言ってんだよ！！リンジャが！！」
カタダ「お前は俺の息子だ！！」

ウラミネを抱きしめるカタダ、力が抜けていくウラミネ
ストップモーションになり声
赤ちゃんの産声

「すいません、奥さんは助かりませんでした」
カタダ「そうか……俺とお前で行くしか無いのだなウラミネ。
俺とお前でこの国を変えよう。お前ならそれが出来るさ」
兵1「失礼します」
カタダ「なんだ？何をする？」
兵2「王様の命により、あなたの子供をお預かりします」
カタダ「ウラミネ！！」
兵1「この子はウラミネというのですか？そのようにお伝えしておきましょう」
カタダ「ウラミネ！！」

ストップ解ける

ウラミネ「涙が」
カタダ「お前は俺の作品だ、俺の最高傑作だ！！アートだ」
ウラミネ「俺は親父に抱きしめられた事はないと思ってた。」
カタダ「そこの君！！」
正和「はい」
カタダ「その娘の事は頼んだぞ」
正和「任せて下さい」
カタダ「お前は変わらないといけない、今度はお前が作るんだ」
ウラミネ「くそー、何を言ってる！！俺はこの国の王子、ウラミネだ！！」

ウラミネ走り去る

カタダ「ウラミネ！！」

カタダはける

千佳「正和さん」
正和「しっかりするんだ」
千佳「今、名前で呼んだ？リンジャの癖に」
正和「千佳さん(正和、持っていたタオルなどで処置をする)」
千佳「正和、私あなたのメロディ知ってたわ、聞いてたの、ずっと昔から」
正和「喋らなくて良い」
教祖「いえー、マークだー！！これでもうリンジャじゃにゃーい！！すごーい！！」

正和、教祖に近づいて信じられないぐらいポコポコにする

教祖「なんだ？なんだよ。偉いのに、私こんなに偉いのに」

千佳「白馬に馬乗りになってポッコポコ」

正和、千佳を背負ってはける

教祖「なんだー？取り囲まれてる。何？なんなの？」

信者出てきて

信者「いたぞー、あんなにマークがついているんだから間違いない。

あれが国王だ！！」

全体から声「そうだ、国王だ」

信者「祭り上げろー！！」

全体から声「オー！！

教祖「やめてー！！やめてー！！」

逃げる教祖、追う信者、はける

ウラミネが入ってきて刀を振り回している

積んであるブロックを蹴り倒す

ウラミネ「誰も彼もデタラメばかりを抜かしやがって、本当の事は誰も言わない。

誰か教えてくれ本当の事を！！俺は誰で！！(マークを外して)これはなんだ！！

これが真実じゃないのか？」

頭を抱えているウラミネ

入って来るのはエニマルとモズク

エニマル「だめだ、全然収まらないよ」

モズク「聞こえないだよ。エニマルのギター」

エニマル「どうすればいいのか！！まったくもってわからんちん！！」

モズク「この人々の声が入り混じったノイズにかき消されちゃってるだよ」

エニマル「きけー！！」

ギターを弾くが音は出ない

エニマル「ダメちん」

モズク「もうーギターのわからずや！！」

ギターが鳴り響き

ヘビーな格好をした兵1が入って来る

兵1「どうしたんだい？」

モズク「誰？」

エニマル「なんて気持ち悪いんだ」

兵1「俺はジミーヘンドリックスさ」

エニマル「誰？」

兵1「ギターをつかさどるギリシャの神様だよ」

モズク「キチガイだ」

兵1「お困りのようだね、エニマル」

エニマル「どうして俺の名前を？」

兵1「カートとジョンがね。天国で俺に教えてくれたんだよ。

天国で彼らとバンドを組んでいるからね。俺もヘブンズゲートで登場機会を待っていたのさ。さあ、ギターを貸して」

兵1がギターを撫でる

兵1「弾いてごらん」

エニマルがギターを弾くと凄い音。

目が見開くウラミネ

エニマル「すごい！！」

モズク「ありがとうジミヘン！！」

兵1「政治も宗教も学歴も反政府運動も何もくだらない事だよ。結局世界を変えるのはアートとロックンロール以外ないよ、よく憶えておいて」

エニマル「これで弾けるよ、ありがとうジミヘン、世界を変えるのはアートとロックンロールだ！！」

エニマルとモズクはける

ウラミネ「それは本当か？」

兵1「本当さ、君も、崩した物を元通りにするんだ。それで全てが変わるよ。真実はそこにあるんだから」

兵1はける。

入れ違いに国王、妃、上手上段から

ウラミネ「アートとロックンロール？それが何を変えるんだ？

アート……」

ゆっくりと求めるようにブロックを積みなおし始めるウラミネ

国王「なんだ？今の雷鳴は？なにか爆発したのか？」

妃「あなた、エニマルは？生きているのね？」

国王「死んだという報告は聞いておらん」

妃「かわいそうだわ、エニマルもウラミネも、私達の息子」

国王「やめろ、今更そんな事を言うのは」

妃「間違っていたんじゃないですか？あなた？だから」
国王「正しい事も時には歪められる。間違っている事も時にはまかり通る。
全てが今更だ、私は進まねばならん。それがどんな道であろうと。
私は進まねばならんのだ」
妃「あなたも戦っているのですね」

モービス入ってきて

モービス「国王、お客様です」
国王「何をこんな時に、叩き返せ」
モービス「それが」

カタダ入って来る

カタダ「国王」
国王「カタダ！！」
カタダ「お久しぶりです、義姉さん」
妃「そんな姿になって」
カタダ「そろそろ、あなた自身も決断の時だ」
国王「何をだ」
カタダ「国民のマークを全て外すように呼びかけろ、そうじゃないと
犠牲者が増える」
国王「全てはお前の息子が仕組んだ事だろう、お前をここで捕らえてもいいんだぞ」
カタダ「国王、私を捕らえるなら自分を、そしてそこにいる妃も捕らえなければなりませんね」
国王「お前知っていたのか？」
カタダ「そりゃ気付きますよ。積年の恨みの代償でしょうか？数々のリンジャ達が望んできたことが彼
の身体に表れたのです。」
国王「そうだった！！あの子の障害は！！」

下手に上半身裸のエニマルにサス、身体中にマークの痣
サスが消えるエニマルはいなくなる代わりに十字架にはりつけられた
マークだらけの教祖、舞台上の高い所にはりつけられる。

教祖「私は神様の代わりになった、神様の代わりに貼り付けになった経典の
題材だ！！全ての人を許し、全ての人を許さない。
私はようやく神と云ういただきに辿り着いた。そしてもうすぐ
まだ見ぬあなたの元へ！！」

信者が入ってきて

信者「撃てー！！」

銃声が鳴り響く

教祖「お父様—！！今あなたのみむねに参ります！！」

リポーターに明かり

リポーター「この世はまさに混沌と狂乱の中に！！

今全てのものがドロドロと、混ざり合って歪な色に変わってく。

熟して混ざり、甘さもすっぱさも併せ持つこれは例えて言うならばなんでしょう？」

モズク走ってきてリポーターに紙を渡す

リポーター「情報が入ってまいりました、ニューセレクション、エニマルより

全てのリンジャ及び、国民の皆さんへ。

BLOCHに集まるように、繰り返します。

全ての人々へ、BLOCHへ集まるように。

BLOCHにてなにかが行われる様です。私も行ってみたいと思います」

走り去るリポーター

国王「そうか、我が子が全てを背負っていたんだな」

モービス「ロケットを飛ばしたあの日から」

国王「それでも私には守らなければならんものがある」

ウラミネ「こんな事でなにか変わるのか？俺は何をやってんだ」

カタダ「それはなんでしょう？守っているのではなく。変えようとしていないだけではないですか？」

国王「変わらないこともある」

カタダ「それでも変えようとしなければいけないこともあるんです」

ウラミネ「変えようとしなければいけない」

妃「あなた」

国王「カタダ、一度塞いだ耳を、今、お前に貸そうではないか。私はどうすればいいのだ？」

カタダ「国王、あなたの背負った罪を、エニマルが背負った罪をみんなで分け合いましょう。

全てが混ざり合えば、それはきっとすばらしいものになる」

国王「罪をか？」

カタダ「罪を全ての国民に、全ての人々にあげるのです。」

国王「罪をあげる？どうやって？」

カタダ「それは我々の息子達がやってくれるはずですよ」

国王「我が子が、か？」

カタダ「ご覧ください」

国王「あれは？ウラミネ？」

現れるウラミネ

ウラミネ「積み上げよう、積み上げればわかるんだ、なにが本当なのか」

カタダ「世界を変えるのはロックとアートだ！！積み上げろ！！積み上げろウラミネ」

国王「積み上げる？」

カタダ「積み上げろ」

ウラミネがカタダの描いた箱を積み上げていく

国王「これが私の育てたあの子」

カタダ「ウラミネ！！見えてきたか？未来」

ウラミネ「積み上げろ、これが何になるのかわかるまで」

モービス「積み上げろ」

国王「積み上げろ」

カタダ「国王、これが俺の、そしてあんたが作りたかった」

国王「最高、傑作だ」

積み上げた箱が完成しピースマークになる

兵2が入ってきてモービスに耳打ちをする

モービス「国王、全ての国民がBLOCHに集まり始めました。

そして、そこに争いや混乱はないようです」

国王「そうか、あの子が変えようとしているのか」

ウラミネ「エニマル、俺とお前は交わる事がないと思っていたよ。

だけど俺とお前は1つなんだ、最初から。俺はこのマークを

信じる事にするよ。これは俺が生まれて初めて作ったものだ。

だから今こそ交わるんだ。ジャムろう！！あれなんだこの言葉？

自然と……」

はけるウラミネ

モービス「我々も見届けましょう、事の顛末を」

国王「そうだな」

はけるみんな

同時に入ってくるエニマルとモズク

モズク「頑張ってエニマル」

エニマル「だめだ、やっぱり帰ろう」

モズク「エニマル」

エニマル「心細か～！！」

リポーター入ってきて

リポーター「BLOCHに全ての国民が集まってきました、その数30万人強。

BLOCHの壁を突き抜けて、何もかもの壁を突き抜けて

全ての人間がここに集まったのです。そして私は今、

楽屋にきています、話を聞いてみましょう。気分はいかがですか？」

エニマル「最悪です」

モズク「エニマル！！いや、彼はやってくれると思うり、思うりん」

リポーター「人々の期待とは裏腹に冴えない表情です」

ドラムの音

エニマル「この音」

ヒンドゥー入って来て

ヒンドゥー「よう」

エニマル「ヒンドゥー！！」

ヒンドゥー「やるんだろ？ライブ」

エニマル「うん」

ヒンドゥー「水臭いのは無しにしようぜ、なあトッコ」

ドラムの音

トッコ「トッコさ」

リポーター「そろそろ本番ですが、今の気分は？」

エニマル「最高です」

モズク「最高です！！」

リポーター「それでは開演の時間となりました、皆さん頑張ってくださいね」

ヒンドゥー「よっしゃーいくかあー！！」

エニマル「おう！！」

リポーターはける

マイクが用意される。

エニマル「こんにちは、ニューセレクションです。

(MCは日替わりでも可)今日は集まってくれてありがとう。

今日BLOCHIに集まってくれた皆さんに俺達からこの歌を捧げます。

聞いてください」

「人は醜い自分を鍵をかけた箱に入れて持ち歩くけど
俺は知ってるよ そんな事しなくても君はじゅうぶん綺麗なんだ
人は弱い部分を買ってきた鎧で覆い尽くすけど
俺は知ってるんだ そんな事したって傷はなくなったりしないんだ

隣の人を見て その人はブサイクだけど良い人だよ
隣の人を見て その人はデブだけど拒食症だよ

誰もが持ってる良い所も 誰もが持ってる悪い所
全部受け止める事が出来たら
ほらもう手をつないでる」

ウラミネ入ってきて一緒に歌う

「人は思い出したくない事をすぐに忘れようとするけど
俺は知ってるよ 君が覚える全てが君を作り上げた宝石だって
人は裸の自分を装飾品で綺麗に飾るけど
俺は知ってるんだ 君が最高だって この世界が最高だって

隣の人を見て その人は体臭きついけど潔癖症だよ
隣の人を見て その人はメガネだけど頭悪いよ

誰もが持ってる良い所も 誰もが持ってる悪い所
全部受け止める事が出来たら
ほらもう手をつないでる」

エニマルとウラミネ手をつなぐ

「手をつなごう 手をつなごう 手をつなごう」

リポーター「見てください皆さん、今、全ての者が繋がりはじめました。
マークを捨て、全ての物を捨て繋がっていくのです。
これを奇跡と呼ばずしてなんと呼びましょうか？
全ての人が目撃するのです。究極のセッション」

歌っている間に登場人物(正和と千佳以外)が出てきて手をつないでいる

「手をつなごう」

リポーター「ここにお集まりの皆さん、国民の皆さん、全ての人間の皆さんに。
人間として、ここBLOCHよりお伝え致しました」
エニマル「ありがとうございました」

礼をしてみんなはける。暗転
スクリーンに文字

「みんなが手をつなげば武器なんて持てない」

明転すると正和と千佳、2人は手をつなぎ点滴で繋がっている

千佳「ありがとう、あなたの血が私の中に入ってきたのね」
正和「お役に立てて光栄ですよ」
千佳「人々はきっとこうやって繋がっていくのね」
正和「そうですね」
千佳「ねえちょっとこれ見て」

正和が目をやった先には2人の間にある血液の入ったパック

千佳「(クスクス笑いながら)ジャムみたいね」

音楽かかる、笑い合う2人。

音楽高くなり暗転

カーテンコール